

2020年6月

各位

毎日、お疲れ様です。南海日日新聞・文化欄・リレーエッセー「つむぎ随筆21」に2018年7月から2020年4月までの20回、下記タイトルで寄稿しました。読んでいただけたら嬉しいです。

- 1回・郵便次郎はサバにとともに
- 2回・夕映えの特攻花
- 3回・与論島の古謡 古事記とゆんぬ
- 4回・「ゆんぬ」島が生まれた話
- 5回・漢字の「左」と与論の「ナー」
- 6回・この世もあの世も極楽
- 7回・ことば検定とウンワラビ
- 8回・漁師（オンジャンチュ）と赤猫（アーミャー）
- 9回・トートゥバナ
- 10回・自然の奇跡、百合ヶ浜
- 11回・ヨーグルトと米軍機墜落事故
- 12回・船魂に召されニライカナイへ（葬法と航海）
- 13回・法の下の不公平・島ちゃび（離島苦）
- 14回・カタカナの手紙
- 15回・初恋
- 16回・ヤー普請で学んだ先人の知恵
- 17回・徴兵と囂
- 18回・銃弾に倒れた孫娘
- 19回・思いで転がる茶花通り
- 20回・与論島探検の旅はつづく

***今まで先輩や友人の方々から収集したいろいろな話やいわれ、地名や姓、土地所有や縁戚関係などを調べていました。すると、一部ですがそこには一つの規則性や宗教的な結びつきが窺われます。1778年、アギタの天津波で与論島の90%近くが襲われた後に新たな統治が行われ、その時に現在の3校区（与論・那間・茶花）の基礎ができたと思われまます。これが事実との確証はありませんが、先に述べた先輩方の話や、言い伝えを一つにまとめると与論島が歩んだ昔がダイナミックに蘇ってくる気がします。先輩方の聞き伝えられた話をできるだけ早く、沢山記録したいのが私の望むことです。突然話を伺いにお邪魔します。その節はよろしくお願ひします。

ご意見等お寄せいただけたらなお嬉しいです。ありがとうございます。

与論町茶花（品覇）2886番地3
喜山康三

メール：iyoron@yahoo.co.jp

長らく与論島と沖永良部島間の郵便物輸送は、サバニが担ってきた。サバニは帆と櫂で両島間50数キロを数時間で航行した。第2次世界大戦が始まる1941(昭和16)年頃まで海人が郵便輸送の重要な任務を担っていた。

サバニ所有の漁師が通信手の肩書で船長の役目を担い、別の漁師を助手にして2人で搬送していた。強風と波に叩かれ煽られるため、船員帽子のクバ傘は鋭角で小さく頑丈に作られ、波風は養でしのいでいた。船尾で帆や舵を操る船長と、船首でもっぱら漕ぎに専念する助手。荒れる海を幾度となく乗り越えてきた。2人の海人はいつしか「郵便二郎」の愛称で呼ばれていた。

元与論郵便局長、永野平治氏は2人が沖永良部を出発すると、岬に立ち、日が暮れるまで海を見つめていた。2人が荒波を越え一踏与論島に向かっていたある日、永野氏の不安が現実となった。逆巻く波頭に船影を追うのだがリーフに砕ける大波でときれときれになった水平線が目に見えるだけ

郵便二郎はサバニとともに

リレーエッセー つむぎ随筆 21

2018. 7. 4

だ。

「遭難だ」。2人の面影を思い出しながら「なぐりさぬ(かわいそうに)なぐりさぬ」と静かに、寂しそうな声で何回もつぶやいていた。

永野氏は静かに語ってくれた。「サバニが出発したとの電報を受け取ると、到着する頃には近くの別れ岬に上り、いつも安否を確認していた。白波に覆われ、荒れ狂う海を見る時の辛さ、波間に船影らしき黒点を見つけた時は安堵した。島をたつ時も岬に上り、黒い帆が波間に消えるまで見届け無事を祈っていた」

その後、二度と郵便船の遭難が起きることはなかった。永野氏は間もなく病で旅立った。与論島の郵便史について多くの聞きたい事を残したまま。

郵政関係者は戦時中には郵便物やモールス信号器、発電機の壊への移送や穴を掘り埋めるなど戦災を避けるため大変な苦勞をした。殉職した「郵便二郎」と賞献された「き方々に感謝と哀悼の意を伝えたい。」

(与論町)

与論島茶花酒に広がるアガサ浜は、学校の授業が終ると、子どもたちが三々五々集まり、時を忘れて遊んだ場所だ。

春が近づいた頃、時にグーシャが来たぞーの叫び声が出た。私たちは一斉に遊びを止め、夕日に手をかざしながら、リーフ沖の潮吹きに目を凝らしていた。凶鑑で見たキャッチャーポートが現れると、時を待たず鯨の潮吹きは消えた。

天気の荒れた日には波に向かって「ウシユコレ(潮を食へなさい)ピーコレ(太陽を食へなさい)ナーン(波)ナーン」と大声を出しながら、押し寄せる波から逃げ、返す波を追いかけた。「沈む太陽は海に食べられている様子だ」と古老に教えられた。「祖父が亡くなる夕日がお供する」という話を聞いたこともある。

波打ち際の子どもの群れに一艘の帆掛けサバニが勢いよく突っ込み浜に乗り上げると、子どもたちは船倉の飛び魚を目かけ両舷から一斉に襲いかかる。漁師はハエを追いつまように、左右に櫂を振り回すが、子どもたちは巧みに獲物を失敬する。

夕映えの特攻花

リレーエッセー つむぎ随筆 21

2018. 8. 3

両手に飛び魚を持ち「魚を釣ってきたぞー」と勇ましくかざしながら帰ると「ウシヤギムヌデル」(櫻かりものだ)、次も豊漁になるからいいよーと、母は笑いながらとがめる事はなかった。

砂に足を取られながらアガサ浜を見下ろす砂丘の頂に上ると、黒ずんだテール珊瑚を積んだ墓盤目の石垣と、墓標群が現れる。そこはアタンとリュウセツランに囲まれていた。

傾き二つに折れた竹竿は葬送旗の名残だ。傍らには崩れかかった木造の小さな家形の祠が建ち、その下には洗骨を待っている遺体が眠っている。周りには赤と黄色の小さくかれんな花がひしめていた。

「墓にあるから墓花なの?」アタンに尋ねると、「あれは特攻花で、アメリカの軍艦に向かった特攻兵が飛行機の窓から投げた花が根付いたものだ」と、舞い散る花束と特攻の様子を交えながら花の生い立ちを教えてくださいました。

特攻兵は夕日に召され、特攻花は生きながら最東ての地から戦の哀れさを今も伝えている。

(与論町)

「ゆんぬちゆるしまや(与論島は)いにくまやあしが(小さくけれど)なびぬすくなか(鍋の底中に)くぬ(五穀が)たまる(溜まる)」。与論島を称賛した古謡を初めて聴いたとき、なぜか素直に心に響かなかった。

島を讃え豊かさを表現するのにくらでも「鍋の底中」はないだろうと感じたからだ。歌詞に対する疑問が湧いてきた。この歌が「宴席で何かの拍子に作られたのではないか」あるいは何かの場面の言葉の誤用や借用ではないか」と考えるようになってきた。

与論島ではくしゃみが出た時、「クスコレ バナ」(くしゃみ(鼻)や新築祝いの「グーシャ ワンサマ シンバツタナゲリ」(鯨がのたうち回って)など、その事象とは直接関係ない言葉が使われることを思い出した。お経や祝詞では、難解な語句が他の言葉に変えられて、予測のつかない形になることがある。もちろん意味は通らない。この古謡にも同じことが起こったのではないが。

与論島の古謡 古事記と「ゆんぬ」 リリース つむぎ随筆 21

2018. 9. 7

この歌が出来た背景に「ゆんぬ」という言葉があるのではないだろうか。与論島の別称「ゆんぬ」は名詞の「ゆん」(五穀豊穡を表す)と、助詞の「ぬ」(の)が結びつき、島名として独り歩きしたと考えると、この歌の見方が変わる。与論の別称「ゆんぬ」はそもそも存在していないのではないかと。

私はこの歌の「鍋の底中」の出生を古事記に探そうとができると思っている。「小名毘古那神(スクナビコナノカミ)は海のかなたの」。この時、海上を照らして近寄ってくる神が「。この場面は与論島地主神社に祭られている守護神の話と酷似している。古事記にある「スクナビコナノカミ」が語呂合わせて前後が入れ替わり「ナビヌスクナカ」となり、与論の別称「ゆんぬ」が作られ、元は神様の名前が「鍋の底中」になってしまったと。与論は「神の島」であった。次回も島の古謡について考察したい。

(与論町)

前回、「ユンヌ」は「与論島の別称か疑問がある、そして、『ナビヌスクナカ』は古事記に出てくる神様の名前だ、この古謡は何らかのお経や祝詞ではないかと考えられる」と述べた。ユンヌの「ユン」は沖繩の有名な民謡、安里屋ユンヌの「ユン」と同じで、五穀豊穡の意味があると書かれている。本来は「ユンのウタ」(五穀豊穡の唄)でユンヌをローマ字にすると「YUNNUTA」となる。続く「NU」が縮音し「ユンヌ」となったと考えられる。

奄美の地名(宇検村の湯湾、瀬戸内町の油井トネル、与論の「ゆ浜」)などに「ゆ」が多いのは海幸山幸(豊穡)を意味しているからだと推察する。雨にかかわる方言にも「ゆ」がある。「軒(ゆるい)、有名な「ゆがふ」などがある。漁労のとき、船の釜を「ゆ」と呼んでいます。これらの由来についてはいずれかの機会に考えることにしたい。

沖永良部の方は自分の島

「ゆんぬ島」が生まれた話 リリース つむぎ随筆 21

2018. 10. 10

を「はなしやる島」(愛しい島)と表現し、与論では「ゆんぬ島」(五穀豊穡の島)と使う。いずれも自分の島を誇る言葉だ。「はなしやる島、与論」あるいは「ゆんぬ島、沖永良部」と使ってもならぬ差支えはないと考える。

長い間、与論島の歴史、方言の文献や沖繩の文献を調べた「ナビヌスクナカ」の意味や出所が分からず、諦めかけた頃、何とはなしに読んだ古事記の一節に釘付けになった。

古謡を古事記の場面にトレスすると、本来の意味は「スクナビコナノ神様、あなたの御魂を鎮め祭りしますので、この小さな島を五穀豊穡の島にされるよう、お祈り申し上げます」という祝詞(ゆんぬごと)となる。これが何かの拍子で今に伝わる与論の古謡になったと考えられる。

ユンとヌが結び付いて、いつの間にか与論島の別称になった。実に愉快で楽しい「ゆんぬ島」が生まれた話でした。

(与論町)

与論島の方で介助することを「ナー」と言う。旅先でふと手にした「漢字の起原」(加藤常賢著)をめくるうち、「左」の字に目が留まった。本書によると、古代中国では介助することを「ナ」と言っていた。左は右を介助する意味を持つことから左字の「ナ」偏は古代中国語で左を意味するナに由来するとの説明があった。

そのとき、「与論島の方言に漢字の成り立ちを発見した」と、まるで金塊でも掘り当てたような感慨を覚えた。

幼い頃、祖母が重たいものを両手に持ち歩いてたことがある。その様子を見た母が私に「ペーく、いじなーなしば」と言われたことがある。「早く言っ介助しなさい」の意味だ。

与論の方言で「ナー」はまさに介助の意味だ。漢字を習いたての頃「漢字の書き順には意味がある。形が似ていても書き順を間違えてはいけない」と先生に言われたことがある。

サンシン(三線)を覚え

漢字の「左」と、与論方言「ナー」 リレーエッセー つむぎ随筆 21

2018. 11. 9

たての頃、父に「音階(左指)は気にするな、声を出して歌うことリズム(右指)が重要だ」と教わった。サンシンを初めて手に取った時は左手の音階に集中するが、慣れてくるとリズムや歌がしつかり身に付いていないと上達しないことが良く分かる。音階はリズムを介助している。

日も落ち、夕闇迫るころ、好きな娘の家の近くで演奏するサンシンは誘い出しのシグナルだ。サンシンの音色は逢瀬の応援、介助でもある。楽譜のない時代、全て自己流でリズムも音階も裝飾音も人それぞれで、一つとして同じ演奏はない。そして好きな男性の演奏はすぐに分かる。

沖縄旅行の際、図書館に立ち寄り、「介助」に関する方言を調べてみたが、どの方言辞典でも探すことは出来なかった。もしかすると消滅した言葉の一つかもしれない。

漢字の「左」は与論方言の奥深さを教えてくれた。

(与論町)

故町田原長氏著書「与論島の民謡と三味線楽」に月ぬ 世んていゆい 影ぬ世んていゆい さんか みじらっしゃ 忘りぐるしゃ」という古謡がある。この歌詞はあの世の人がこの世を懐かしんで歌われたもので「月の夜も照り、影も照りサンカは楽しくて忘れ難い」と説明されている。

歌詞の「月が照る」は理解できるが「影が照る」は不自然だと思ひ、古語辞典を調べた。「ていゆい」は「喜れる」の意味で使われていることが分かった。「月の世も喜れ、影の世も喜れサンカは楽しく忘れ難いものだ」と説明を変えればどうかと思う。光も音もない深い闇とすべてが凍てつく寒い極限の世界を表しているのだろうか。

青年が夜遊した後、帰りに道に奏でられる「道イキントー」という曲がある。この中で歌われる歌詞の一つだ。道イキントーが奏でられた後、三味線を弾くと幽霊が出ると言われる。そんな物悲しいメロディーは、何か意味深なものを感じさせる。

この世も、あの世も「極楽」 リレーエッセー つむぎ随筆 21

2018. 12. 13

「サンカ」の意味について父に尋ねたが知らなかった。しかし、父から教わった改葬、洗骨する事を「サンカ バタ アーチ」「現世の肌を削ぐ」という言葉を思い出した。現世からあの世への離脱として使われている。新生児を初めて太陽の光に当てる(拝む)事を「サンカ ウガマシヤン」という。そうしたことから、サンカは太陽、現世の意味であることが分かった。あの世から現世を慕い、亡くなった方への敬いが込められている「極楽」の意味であることが理解できる。

相対的に、「あの世を称えた表現があるか」と考えたとき、風葬墓を「ハンシヤ」と呼んでいることを思い出した。恐怖の代名詞であったハンシヤは実はあの世を称えた呼称だと気が付いた。死者は現世をサンカと呼び、生者はあの世をハンシヤと呼び互いに称え合っているのだ。古謡は生きる力を伝える、そんな気がする。

(与論町)

林修の「ことば検定」は楽しみにしているテレビ番組の一つだ。中でも記録を進めている与論方言につながる言葉が出てきた時はなおさらうれしくなる。過日、放映された魚の「ほうほう」の名前の由来は鳴き声とのことだった。与論島にホウボウに関わる伝承があるので紹介したい。

与論ではホウボウを「ウンワラビ」(海童)と言っていた。漁師がくり舟で漁に出かけるとき必ず携えるものがある。ウンバフ(海箱)だ。それは幅50〜60センチ、高さ20センチ、奥行30センチ程度の弁当箱に似た木箱だ。中には竿、釣り道具、たばこなどが入っている。方が一週間にわたるときの救命浮き代わりにもなっていた。その他に、重要な役目があった。

それは時々釣れるホウボウを入れるためだ。当然、他のいろいろな魚が釣り上げられるがホウボウだけは泣(鳴)きたす前にウンバフに閉じ込める必要があったからだ。

理由は海神はウナイ神(姉妹神)のため事、子ども泣き声には敏感で

ことば検定とウンワラビ(海童)

リレーエッセー つむぎ随筆 21

2019. 1. 24

供の泣き声を聞くと怒りだす。ホウボウが泣くと、乳飲み子が泣いていると勘違いしたウナイ神は怒り、暴風を呼び、海が時化るとのいわれがある。ホウボウを泣かしたり、泣き声を漏らすことは禁忌であった。

ホウボウがウンワラビ(海童)と名付けられた理由が伺える。くり舟に乗って漁に出て帰る時までウンバフ(海箱)は手元から離すことはなかった。漁に出ると陸で使われる言葉とは別の言葉を使っていたようだ。例えば、包丁はベージュ、雨はアマム又、豚は牧ぬム又などと呼ぶ。以前、東北などでは狩猟する方はマタギと呼ばれ日常語と異なった隠語や忌み嫌った言葉を使っていたと聞いたことがある。

与論の漁師も同じように海を畏怖し、敬う意味で特別な言葉を使っていたようだ。私は漁師が使っていた特別な用語を「ウンジャングチ(海神口)」と呼び、収集している。

今回は、これについて述べたい。

(与論町)

前回、本土では魚の「ほうほう」は泣き(鳴き)声の名称となり、与論島ではウンワラビ(海童)となったことに触れた。神代を迎ると、ウンワラビが本来の名称ではないかと思う。時代が進み海神の存在を必要としない本土では泣き声だけが取り残されたのではないだろうか。

海神(ウンジャン)口が漁師仲間だけで使われていたためか、古くでさえ、その存在を知っている人は少ない。昭和50年代以降、新しい海神口は収集できていない。本来の意味が知られることなく広く使われている海神口がある。今回はこれを紹介したい。

与論島の一部には「ウンジャ・バル」と呼ばれる地域がある。今では使う人も少なくなってきたがそこで使われる方言は「ウンジャ・オン(言葉)だ。「オン」は日常「苦汁」の意味で使われている。「ウンジャ・バル」は他の地域より半濁音がなく、抑揚やアクセントに特徴があり、単語が他の地区とは違っているものもある。大切な文化遺産であり、保存したいと思ひ音声記録をしてきたが僅かしか収集でき

きないでいる。

リレーエッセー つむぎ随筆 21

2019. 2. 22

漁師(ウンジャン チュ)と赤猫(アーミャー)

海神口では海水を「ウンジャ・ム」又「エ」言っている。これから類推すると「ウンジャ・バル」は漁村の意味で、「ウンジャン チュ」は漁師の意味と理解できる。昭和30年代頃まで続いた糸満に子弟を年季奉公に行かせることを「ウンジャ 売い」と言っていた。海神口はユングトウ(祝詞)や呪いではないかと考えている。「オン」は塩の訓読みで、方言の中では神靈的な表現には訓読みが用いられていることが見て取れる。

方言や地名、海、自然、慣習などさまざまなものを「音」や「イメージ」でトレースすると昔懐かしい映像が浮かび新たな意味が醸し出される気がする。

今まで収集した海神口を紹介しよう。包丁はベージュ、雨はアマム又、帆柱はバツサー、刀はシピン、船底に漏れる海はユー、波浪はムサ、釣り糸や縄の事をカシラ(葛)、豚を牧又ム又、山羊や牛馬をユーチバギ(四足)、餌をユトウなどだ。中でも、不漁の事を「アーミャー(赤猫)」と表現しているのは愉快だ。

(与論町)

1968 (昭和43)年、NHKの「新日本紀行」で与論島が放映されたのを契機に若い観光客が急激に増加した。その頃、両親が経営する民宿を手伝っていた。耳元に赤いハイビスカスを飾った女学生が宿に帰ってきた。それを見た母はシヨックを受けた様子で「今の子どもたちのすることとは」と、あきれたような言葉を私に投げ掛けた。理由が分かっていたのは随分後のことだ。

方言や地名等を記録しているとき、花を忌み嫌ういわれがあることを知った。明治生まれの母にとって花は忌避そのものだった。屋敷の周りには花は植えるな」と教えられた。真っ赤なハイビスカスは特に嫌われ、「グシヨウバナ」(後世花「あの世の花」)、「トートウバナ」(葬儀・祭祀に使用する花)と呼ばれていた。「バナ チチエーボ ヌチヘーサン(花を慈しむと命が短い)。バナ ナイヤ トウガ ヤ ネンヌ(花に罪はない)」。どこに咲いている花でも持ち帰ることが許され、むしろ勧められた。

1960 (昭和35)年、母方の祖父の洗骨があつた。

トートウバナ

つむぎ随筆 21

2019. 4. 4

た。早朝に起こされ、前日に用意した傘やスコップなどを持って墓地に出かけた。明け方の暗い道で、父にトートウバナを取るよう言われ、道端のハイビスカスを数本折って持っていた。墓に着くと木造の彫形はすでになく、祖父が埋葬されている辺りに家族、親戚全員が屈む中、父が何かしら祈っていた。

掘り出しが始まると、すぐに祖父の頭蓋骨が出てきた。父はほほ笑みながら「祖父のハタサー(頭蓋骨)だ、君がきれいにしなさい」と手渡された。懐中電灯の明かりを頼りにこげ茶色の頭蓋骨に手にした。一瞬、怖さを感じたものの、安らぎにも似た不思議な気持ちになったことは今でも忘れることができない。

夜も明け、日が差し始めると傘を広げ、太陽の光が祖父のハタサーに当たらないように抱きかかえた。遺骨は足元から先に骨壺に収められ、上半身と続き、最後にハタサーを置き、白い布で覆い、骨壺の蓋を閉じた。墓地を後にするとき、ふと振り返ると母が墓前にハイビスカスを手向けていた。

(与論町)

つむぎ随筆 21

2019. 5. 8

与論島はサンゴ礁のリングに囲まれた島だ。海岸線に沿うように据置が広がり、青と白のコントラストに映える堡礁へと連なる。島から少し離れたリーフの上に浮かぶ百合ヶ浜は、エングレーディングにはめ込まれたダイヤモンドのようだ。美しい不思議な浜はあの場所にとろして出来たのかその理由を知りたい衝動に駆られた。

県道茶花線を城跡に向かう途中、立長字のイナパゴーがある。与論町最初の水源地となった。そこは「底なし沼」と言われ落ちた人は伊平屋口(イビヤグチ茶花港水路)に浮かんでくるといふ物騒な伝承があるほど、水が豊富な場所だった。

伝承を知る数年前、ある調査技師から「茶花港水路の海底には断層痕と思われ巨大な深い溝が外海に向かっていて」と教えられた。科学的な知識や情報もない時代、イナパゴーと伊平屋口は何らかのつながりがあることを先人はすでに見抜いていたのだ。

その後、地質調査専門技師と知り合い、与論島の航

自然の奇跡、百合ヶ浜

リレーエッセー

つむぎ随筆 21

空写真を見せながら水路の断層痕の話をした。彼は「水路の断層はイナパゴーから高千穂神社北側の断層へと続き、大金久海岸南端につながる」と教えてくれた。そのとき、前にある大金久海岸南端には枯れることのないパマゴー(浜井泉)があることを思い出した。

島の西側にあるイナパゴーと東側にあるパマゴーは一つの断層でつながっていることが分かった。それだけが地下に水盆(自然の地下ダム)を持ち大量の地下水を蓄えていることも。そのため、この二つの井泉は有史以来枯れることはなかった。

二つの水盆は海側に大きな礁湖を抱え、礁湖の海底下に水盆を共有していると思われる。そして、礁湖の縁であるリーフが周囲より若干落ちているのが観察できる。

この偶然が百合ヶ浜誕生の理由と考えている。自然のいたずら、奇跡は大きな遺産を私たちに残してくれた。

(与論町)

1955(昭和30)年、アメリカ上陸母艇3隻が大きな口を開けて茶花海岸に乗り上げてきた。私たち茶花幼稚園の園児は浜に並べられ、その後、船に招かれた。米軍兵が私たちに柔らかいコップを渡した。そこに注がれた白い汁はこれまでに味わったことのない、おいしさだった。天にも昇る心地がした。ヨーグルトだったと思う。

当時、父が町の消防団長をしていたこともあり、火事や事故、遭難の出来事はよく耳にしていた。その母艇は島の沖で墜落したアメリカのジェット戦闘機の残骸を回収に来ていた。戦闘機は東の空から真っ赤な火の玉を引きずりながら中学校の上空を通り、西の海に突っ込んでいった。校庭には機体の破片や火の粉が雨あられのように降ってきた。近くの畑には操縦席やガラスが燃えながら落ちてきた。小学2年生だった兄は私に自慢げに話していた。

父は数日の間、アメリカ艦艇に同乗して漁師と日本人通訳の仲立ちをしていた。戦闘機はハキヒナ湾沖に墜落し、パイロットは漁師が助けたようだ。漁師は

ヨーグルトと米軍機墜落事故

つむぎ随筆 21

2019. 6. 12

お札にバラシユートをもらったと話していた。

父は親子ラジオも経営していた。その関係で私は早朝から夜中まで沖繩民謡や歌謡曲、そしてニュースも聞いていた。与論のアメリカ戦闘機墜落事故の4年後、事故の記憶も薄れようとしていた59年6月30日、沖繩の宮森小学校にジェット戦闘機が墜落し、大惨事が起きたことをラジオで知った。同世代が犠牲になった悲惨な事故は悲しかった。

この年になり、与論島の米軍機墜落事故を思い出した。墜落した飛行機は当時の最新鋭機で、その部品はすべて持ち帰らなければならなかった。父は戦闘機の先端は丸くサメのような口が開いていると話していた。機体の特徴から宮森小学校に墜落した同じ型ではないのかと思った。

もし、与論での墜落事故の原因を調べ、機体を改善していたら、宮森小学校米軍機墜落事故は起きなかったのではないだろうか。6月になると、ヨーグルトの甘さとともに、二つの米軍機墜落事故を思い出す。

(与論町)

つむぎ随筆 21

2019. 7. 12

れる。

葬送の道すがら、沈黙が求められた。葬列最後尾から「じんぶーどー よーよーどー」と木霊するように時折、呼び掛ける人がいる。「じんぶーどー」とは「風だよ」の意味だ。「よーよーどー」は「よーさー」と同じ意味で今の方向に進みなさい、保針せよとの意味だ。「旅立つ者よ風はあの世に向かって吹いている。迷わず直進しなさい」と祈っている。まさに、航海中の操舵室の場面だ。風習の断片は2003(平成15)年、火葬場が出来るまで継承されていた。

1962年(昭和三十七年)頃まで樹上葬があった。幕末の奄美を記録した「南島雑話」の中に出てくるスケッチとはまるで違っていた。十数以上の高い岩礁の頂から棺桶がシユロ縄で吊り下げられていた。

ニライカナイをより遠く望むために高い所に吊り下げられたとノロの孫だと、老婆が教えてくれた。帆船のマストにある見晴し台のように、水平線の彼方を望む。いよいよカリユシとさよならする時が来た。名残は尽きない、泣くのはよそう、祝ってあげよう。

(与論町)

船魂に召されニライカナイへ(葬送と航海)

絶海孤島といえども、打ち寄せる波はさまさまなユリムンを運んでくる。やってくるのは漂着物だけではない。文化、文明が大海を渡ってくる、それは島にとっては悪徳でしかないこともある。一見、閉ざされた世界に見える孤島は、遙か昔から阻む壁もなく、無防備に機層にあらゆるものを混沌と受け入れ享受し、仕打ちを甘受してきた。一方で孤島に生きる者が外の世界に目を向け、水平線の彼方に憧憬を抱くならば、その瞬間から「板子一枚下は地獄」というケイシユウ(外海)の畏怖に囚われる宿命にある。ニライカナイを神地と崇めるのは、外海への旅立ちの困難の故であろう。果たせぬ夢と憧憬をそこに見たのである。葬送儀礼は外海への船旅を模している。棺桶をフナギヌ(船衣)、棺桶を担ぐ棒はサバニで使うバツサー(帆柱)と決まっていた。帆柱を調達するには、わら草履を脱ぎ素足で自浪に入り、横たわるサバニから断りなく持ち出すのである。帆柱の両端に巻いた白紙は残したまま返さなければならぬ。そのサバニには航海安全と豊漁が約束さ

今から54年前、旧名瀬市の高校に進学、新しい生活が始まった。楽しみの一つは映画館に行くことだった。休日の朝日館は高校生でいっぱいだった。私は西部劇に夢中になった。裁判の阻止をめぐり悪党は判事を狙うが、保安官が阻む。銃撃戦に館内は大歓声が沸き上がった。

西部劇を見ながら与論島での出来事を思い出した。中学生になったある日、買い物に来た客と父が店先で何やら話している。土地の境界争いの相談のようだった。聞き耳を立てていたが長居もできず退散した。「復帰前まで裁判のため、名瀬に行く必要はなかった」と父が話していた。

記録によると、1952年2月に現在の図書館隣接地、アガサ公園に19坪(約62平方尺)ほどの木造トタン葺き平屋の裁判所が建築されている。裁判が始まると、方言が飛び交い、大声が外まで響き、窓の外は大勢の人だかりができた。「見世物小屋のようだった」と父は話していた。

戦後から1953年12月に日本復帰するまで、奄美群島も西部劇と同じように

法の下の不公平・島ちゃび

つむぎ随筆 21

2019. 8. 16

巡回が行われ、判事が島々を回って法廷が開かれていたようだ。裁判内容に制約もあつたようだが迅速で費用負担が軽く、住民には好評だったとある。

復帰すると経済的に困窮している人を狙つたいわゆるスラップ訴訟が横行していたことを成人になって知った。父に相談に来た人も、経済的な理由で奄美大島の裁判所に行けずに泣き寝入りした。

離島に住む者は法的手続きや免許更新、各種講習会の受講のため、時に島渡りをしなければならぬことがある。特に、医療環境は深刻だ。ドクターヘリが配備されたが、生命に危険が差し迫った状況でなければ要請できないという。

与論島の場合、島内で処置できない急患は定期船が航空機で沖縄に行くことが多い。飛行機の空席はあるか。病院は受診できるのか。悪天候による欠航はないか。当事者にすれば人生を左右する問題だ。離島に住む者は今も経済、精神負担を強いられている。これも「法の下の不公平・島ちゃび(離島苦)」の一つだ。

(与論町)

小学生の頃、PTAで母が学校に来ることが嫌だった。母が婆さんに見えるからだ。恥ずかしい思いをしたので、母に「PTAに来るな」と怒ったが理由は言えなかった。

奄美大島の高校に進学していた頃も恥ずかしい思いをした。下宿のおばさんから渡された手紙を見ると、宛名も宛先も中身も全てカタカナで埋め尽くされていたからだ。母は漢字もひらがなも書けない事をその時、初めて知った。後年、明治生まれの人は文字が読めなかったり、書けなかったりする人が多いことを知った。

両親が明治生まれのため、時に奇怪とも思われる貴重な体験をした。方言を学ぶこともできた。小学3年生の頃、体全身が痒くてたまらず、母に告げると「道路脇に落ちている鼻緒が切れた藁草履を片方だけ拾ってこい」と言われた。どんな意味があるのか、聞いてみようと思つたがなぜか聞けなかった。

藁草履を拾って自宅に戻ると、母はタスキ掛けて待っていた。すぐさま便所に連れていかれた。当時の便

カタカナの手紙

つむぎ随筆 21

2019. 9. 20

所は離れ小屋でポットン式、戸板も付いていない。母は私を裸にすると、準備してあつた藁束に火をつけ、拾ってきた藁草履に塩を擦りつけ、炎の上で大きな輪を描きながら、「やんめー(病)うぶしま(大きい島)びゅーしま(広い島)かてい(へ)ばい(行きなさい)」の呪詞を唱えながら私の体全体にその汚い藁草履の塩を擦りつけるのだ。痛みとおかしさがまじり、思わず泣き笑った。

医者はおらず、薬もない時代、1週間も生死をさまよう高熱に襲われながら母の手当てで生還したことがある。病弱とヤンチャのお陰でさまざまな病気やけがをした。そのたびに母の治療法を経験し、一命をとりとめたことは一度や二度ではない。

母の口癖は「両手のひらに乗せられるほどの未熟児で、けがだらけの君がよく生きてくれた」だった。その言葉を時折、思い出す。数え42歳で私を産んでくれた母に感謝の気持ちを伝えたいことがあつたのか、と後悔するばかりだ。(与論町)

1956(昭和31)年、小学1年の出来事が時々思い出される。かやぶき屋根の校舎は板壁で二つの教室に仕切られ床は土だ。そのため机と椅子はいつもカタカタ動いていた。

授業中、突然の土砂降りて教室に雨が流れ込んでくると、足首まで泥水に浸かった。幸いとはかりに西足で泥遊びに夢中になっていると横から教科書が泥に落ちてきた。慌てて拾い上げ制服の裾で拭きながら上目で教壇を見上げると担任の先生が微笑んでいた。

家に帰っても先生の優しい笑みを思い出した。先生に会いたくて学校に行くのが楽しくて仕方がなかった。病弱だった私は「具合が悪くなったらいっつも先生に告げて帰ってきなさいよ」と母に言われたことを思い出した。

早速、実行することにした。机にうつぶせになってみると、しばらくして先生が横に来て額に手のひらを当てながら「具合が悪いの？」とつぶやいた。仮病のつもりが私はそのまま寝入ってしまった。

気が付いたら先生におんぶされて送られている。道

初恋

つむぎ随筆 21

2019.10.24

中、通りすがりの人が私の事を尋ねていた。先生のぬくもりと香しさが体中に伝わってくる。先生は私の様子から既に仮病だと分っていたと思う。「2年生になったらもっと勉強しなさいよ」と先生に言われ、意気込みながら新学期を待った。

進級の日がやってきた。金属音の甲高い三点鐘が鳴ると、全校生徒が急いで校庭に集まった。鐘は大砲の響きようを逆さに下げたものだ。全校生徒が校庭にクラスごとに整列した。列の前には担任の先生が立っている。

校長先生の横に下を向いたままの先生がいる。よく見ると、1年生の時の担任の先生だ。時折、ハンカチを目頭に当てている。「何かあったのか」と不安になった。校長先生のあいさつが終わると、「秀子先生が結婚のため……」。頭の中が真っ白になった。家に帰ると兄や姉から「秀子先生と結婚できないね」とからかわれた。

母だけに打ち明けていたのに……。おしゃべりな母が嫌いになった。

(与論町)

二十歳の頃、父に「ヤー(家)普請に行つて来い」と言われた。親戚の新築には普請する習慣がまだ残っていた。以来、大工のまね事が始まった。

古民家を修理して驚いた事がある。杉の柱は朽ち壊れているが、シャーク(クマの木)やイーク(モッコク)は虫食いでハチの巣状になっているもの、頑丈で壊れていない。古民家は取り壊しても柱は使い回しすると言われている。強靱なのだ。

屋敷を開くときは地勢、地形を考慮しながら場所を選定決める。周囲には福木を植栽し石垣を巡らし、地面を掘り下げている。掘り下げ屋敷は防風だけでなく類焼や延焼防止の役目があり、人災への備えも怠っていない。

「井戸を掘ったら周囲に福木を植えなさい」と言われている。福木は直根のためカジュマルなどの木根が井戸壁を壊す事から木根侵入を防ぐ地中のバリアー(壁)となる。また、パイ(地下に埋め込む柱)となつて地震による井戸壁の崩壊を防ぎ、井戸を守つて

ヤー普請で学んだ先人の知恵

つむぎ随筆 21

2019.12.6

くれると古者から教えられた。消防団長を40年以上も務めた父に「火事が多い時期と原因は？」と尋ねると、「パンバラバー(台湾坊主)の吹く4、5月に多い」との答えが返つてきた。高床下から吹き込む風で煙の灰に埋めたウツギー(埋め火)が舞い上がり、駆け付ける間もなく一瞬にして全焼した事例もあったという。

古い屋敷には「ヒンパン」やそれに代わる生け垣などが多く見られた。屋敷に吹き込む風を弱める遮壁の働きをしている。「門は一尋(1・8m)以下広げてはいけない、そして直角の曲がり造りなさい」と言い伝えがある。そよ風は受け入れ、強風を止めるいわば風のコントローラーだ。

自然災害に備えるには自然を注意深く観察する事から始めなければならぬ。家を造る棟梁も体の主治医も自分自身だ。知恵は繊細な観察と、それを反響することから生まれると教えられた。

(与論町)

1970(昭和45)年、小型船舶操縦免許制度が始まり、私も試験を受ける事にした。試験会場は中高年の漁師でほとんど埋まっていた。会場は大声が響き、異様に騒々しかった。試験官が「耳の遠い方は手を挙げて？」と大声で叫ぶと、一段と騒々しくなり、会場はほとんど人が挙手した。漁師には難聴が多い事に驚いた。

ある日、友人の古老が亡くなった。葬儀中に埋葬用の穴を掘るため数人で墓に出かけた。その役割は「掘堀人」と呼ばれ、通常は近親者が担うが、親しいことから頼まれた。葬列が墓場に近づくと、あの世への道標として藁束に火をつける儀式があり、その係も担うことになった。

穴掘りを始め、一思つくとそばにあった墓碑に目が留まった。享年1歳、幼子の名が刻まれていた。一緒に来た人に尋ねると、古老と娘がウランに銃撃され、娘が亡くなり古老が大けがを負った、と教えてくれた。

葬儀を終え、老妻に娘の死について尋ねると、娘の死や夫のことを語ってくれた。

徴兵と聾

つむぎ随筆 21

2020. 1. 17

た。その時、古老が聾であったことを初めて知った。「父の呼ぶ声で家の裏に回ると突然、父に頭を抱きかかえられ、竹の小枝を両耳に突っ込まれた。両耳から鮮血が吹き出し激しい痛みに襲われた。それから何も聞こえなくなった。長い間、仕事は手につかず夜は毎晩布団の中で泣いていた」亡き夫の世代には同じように障がいを持つ方が大勢いることを教えてくれた。砂を目にこすりつけ、弱視や失明寸前になった人もいた。精神障がいの振りをしたところ、戦後は障がい者扱いされ、本当に精神障がいになった人の話も聞いた。

戦線から次々と遺骨が帰ってくる。万歳、万歳。英霊が帰ってきた」と島中が湧き立っている。徴兵の足音に怯えていた父母の姿は想像を絶する。「満州に行けば広大な土地がもらえる。徴兵がない」と、満州開拓地行きを役場職員から促される。島で生きていくためには障がい者になる道しか残されていなかった。野火が広がるように聾が島中に拡散された。

(与論町)

戦時中の夏の日。親子3人が牛車で妻の実家に向かっていた。妻は牛の手綱を引き、夫は娘を抱き、ついてきた。妻は戦闘機の轟音と銃撃の音に驚き、道端のソテツ叢に飛び込んだ。一瞬の出来事に、耳が不自由な夫は何が起きたのか理解できず、娘を抱いたまま戦闘機の標的となり、銃弾を浴びてしまった。

銃弾は娘を貫通し、夫の腹部まで達していた。担架代わりの戸板は血に染まり、娘はすでに息絶えていた。夫はかろうじて一命を取り留めることができた。

夫は自ら聴覚を失うことで徴兵を免れることができたが、アメリカ軍機の銃弾で生死を彷徨い、娘の命を失うことになった。遠い異国で起きていると思った戦争は、ある日突然、思いもかけず自身自身に襲いかかってくる。戦争は憎い、戦争はするものではない。後年、念を押すように、妻が言っていた。

真夏の日が傾き始める頃、牛車の手綱を引き、愛娘を抱き歩む親子にとんな思いで引き金を引くことが

銃弾に倒れた孫娘

つむぎ随筆 21

2020. 2. 21

できたのか、狂気の沙汰としか思えない。徴兵や志願で戦場に向かった人々は「二度と戦争はするな」と、異口同音に戒める。

与論町誌(旧刊)には、1952年の記録で276人の戦没者が掲載されている。与論島でアメリカ軍機の銃撃で4人が亡くなっている。その中に古里の竹井喜美里氏の子と記録されている。

亡くなった孫の祖母は夕日が海に映える兼母浜近くに住んでいる。祖母は孫娘を待っていたが、届いたのは悲痛な知らせだった。孫娘の命が奪われたのは敗戦目前の1945(昭和20)年7月13日。優しく大切な友人は2010(平成22)年12月31日安らかに逝去された。享年96歳。

亡くなった古老(竹井喜美里・男)の友人は「昭和初期世代は徴用工となった人が多い、私も徴用工だった。一回り上の大正年代生まれの多くの男性は徴兵拒否のため、自ら聾になり、漁師を生業とするのが当時の世相だった」と教えてくれた。

(与論町)

